

氏 名 鎌田 紗弓
ヨ ミ ガ ナ カマタ サユミ
学位の種類 博士(音楽学)
学位記番号 博音第312号
学位授与年月日 平成30年9月30日
学位論文等題目 〈論文〉
歌舞伎鳴物における伝承と変遷
—近現代における能楽手法の手配り・演出—

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	植村 幸生
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	安良岡 章夫
副査	東京藝術大学	非常勤講師		高桑 いづみ
副査	東京藝術大学	非常勤講師		配川 美加

(論文内容の要旨)

本研究は、近現代の歌舞伎鳴物において音楽構成が大きく変遷したとされる能楽手法(能楽囃子に由来する演奏手法)について、従来別個に扱われてきた出囃子・陰囃子双方にわたる分析を行うことで、多様性に富んだその伝承実態を明らかにするものである。なお、広義では歌舞伎における三味線以外の楽器全般とその演奏を指す「鳴物」のうち、本研究はとくに四拍子(しびょうし)と称される大鼓・小鼓・太鼓・笛を検討対象とする。また明治維新(1868年)から現在にいたるまでを「近現代」として扱う。

楽器編成の由来を能楽囃子にもつ大鼓・小鼓・太鼓・笛の鳴物は、独自の伝承を確立していった近世を経て、明治維新という転機を迎えた。階級差という前提が崩れ、より詳細な能楽囃子の手配りの情報が流入したことは、歌舞伎鳴物における能楽手法に「芸の質の相違」をもたらしたとされる。しかしながら近現代における具体的な演奏内容の検討は進んでおらず、今日演奏される内容の歴史的な位置づけは宙に浮いたままであり、近世に関する研究成果との接点も捉えがたい。このような研究状況をふまえ、本研究は芸談・雑誌記事等の分析から近現代の状況を捉え直したうえで、出囃子・陰囃子双方における手配り(音楽構成)の多様性や傾向の変遷を明らかにし、聴覚面から伝承と史の変遷に迫る。

本論は3部構成をとる。

第1部では、先行研究が導入史として示す人物関係を確認したうえで、能楽囃子導入に否定的な立場のものをふくむ芸談・雑誌記事を検討し、ともすれば一括りに「能に近づいた」と捉えられがちな歴史的背景を再考した。能楽手法が歌舞伎鳴物としてどうあるべきと捉えられているかに着目すると、近現代には、歌舞伎鳴物方の解釈の多様性、能楽囃子導入への反発といった新たな側面が見出される。さらに音楽実態の変化を窺わせる記述を総合することで、約150年間における推移には①能楽囃子からの転向者による手法の持ち込み(明治初頭) ②転向者不在のなかでの問い直し(明治中～末期) ③特定流派における能楽囃子稽古を経た打ちものの改革(大正末期～昭和初期) ④広く能楽囃子研究が可能になったことによる笛を含む全体的変化(戦後)という4つの転換点があったと思われることを指摘した。なかでも④は、ある種戦略的に進められた③に比べて注目されていないが、斯界全体としての現行伝承の形成という意味で、大きな転機となった可能性が示された。

第2部では、曲名以下のレベルでほぼ全く多様性を検証されてこなかった陰囃子について、1930～2010年代の『仮名手本忠臣蔵』の映像・音響資料をとりあげて分析した。大序・三段目「刃傷」・五段目「二つ玉」の場面全体の劇進行を示したうえで、【天王立下り羽】13例、【置鼓】12例、【下り羽】2つの件り26例、【序ノ舞】4つの件り48例、【早舞】3つの件り37例、【早笛】13例の計149例を比較検討し、演奏者への聞き取りを行ったうえで傾向の変遷について考察した。1960年代後半に至るまで今日とは大きく異なる実態が観察されたことをふまえ、サンプルの限られていた先行研究では看過されがちだった流派差・個人差の問題、演出ごとの臨機応変の工夫などを指摘した。また聞き取りからは、戦後世代の演奏者による改革の影響力の大きさや、録音機材の発達が発達が現行伝承の定着に大きく影響したことなどが窺い知れた。

出囃子を扱う第3部では、近現代の変遷について音源から推測される点をまとめたのち、多岐にわたる現行長唄曲における手配りの比較考察を進めた。1900～1950年代の【狂ヒ】11例の音源分析からは、大鼓・笛の定着時期の遅れという言葉分析を裏付ける結果を得た。現行レパートリーについては、曲ごとの改作状況が記録されない以上、変遷過程を明確には特定しがたい。このことをふまえ、長唄30曲より【序ノ舞】10例、【下り端】7例、【出端】9例、【羯鼓】5例、【早笛】7例、【(神舞)二段目・三段目】10例、【舞働】3例の計51例を抽出し、どの時点の作調・改作においても前提となる三味線の旋律との対応関係に焦点を当てた。「複数の長唄曲において各手法がどのような共通点・相違点をもつか」を個別に検討したうえで、その結果注目された三味線に対する鳴物の音の粗密感の違いを、長唄《賤機帯》一曲に特化した形で示すという手順を踏んだ。最後にパターン化の度合いなどから試論的に長唄曲・鳴物ごとの定着時期の違いについて推測し、出囃子が幕末の簡略な形式から重ねてきたとされる「工夫」について、音楽内容の検討が考察の端緒ともなりうることを示した。

歌舞伎鳴物は近現代に数度の転換点を経て、演出用途や流派差などによる多様性をある程度保ちつつ、能楽囃子の手配りと結びついた能楽手法の音楽実態を形成してきた。その背景には、メディアの発達、役者と演奏者との力関係の変化、さらには社会全体における歌舞伎のありかたが「伝統芸能」へと舵を切ったことなど複数の要因が見てとれる。基本的には口伝という形をとりながら附・録音という記録も共有されるようになったことの影響は大きく、音楽構成のみならず芸をつくりあげる「間」の問題にも通じていることを指摘し、論を結んだ。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、歌舞伎鳴物のうち能楽手法に着目して、陰囃子・出囃子における手配り（音楽内容）を主に音源資料から精密に分析し、近現代における伝承実態と変遷を明らかにした力作である。

笛・小鼓・大鼓・太鼓を中心とする歌舞伎鳴物については、現行伝承に限っても長唄などの三味線音楽に比べて研究が少なく、中でも、作調・改作に関する記録の欠如から、現行伝承に至る歴史の変遷に関しては曲名レベル以下の分析は殆ど行われていない。申請者は、第1部で能楽手法の撰取に関する多様な言説を分析し、明治以降150年間に4つの転機を経て現行伝承が確立したことを指摘した。第2部では1930～2010年代の『仮名手本忠臣蔵』大序・三段目・五段目から全149例の陰囃子を比較分析して演出ごとのエ夫と変遷を明かにし、現役演奏者への聞き取り調査による検証も行った。第3部では出囃子（舞踊音楽）について、①1900～1950年の「狂イ」の音源分析、②長唄30曲に見られる能楽手法7種計51例の三味線旋律との対応関係の分析、③長唄《賤機帯》1曲中の三味線の拍に対する鳴物の伸縮倍率（粗密感）の変化の分析、を行い、鳴物の音楽構成の類型に照らして作調・改作を考察する可能性を示した。第2部・第3部での詳細な音楽分析の結果は、明快で緻密な表に整理して提示された。

本研究の最大の成果は、現時点で活用可能な音源資料を駆使して、これまで別個に研究されてきた出囃子・陰囃子の双方を対象に、歌舞伎鳴物の現行伝承に至る変遷を手配りレベルで具体的に分析・検証した点にある。分析の視点や手法もユニークであり、歌舞伎鳴物の分析研究に突破口を開いただけでなく、東アジアの古典的な劇音楽の分析にも応用可能な汎用性をもつ点も高く評価されるべきであろう。

その一方で、先行研究に対する検討や言及に不十分な箇所がある点、第1部で近現代に対比して近世における能と歌舞伎との隔絶を強調しすぎている点、もともと抽象度の高い音楽分析研究を志向してきたゆえか、複雑な歴史の変遷に対する考察や記述がやや一面的である点、などは然るべく修正が必要であろう。また、鳴物に対する集中度に比すと、能楽や長唄全般に関わる記述はまだ荒く大雑把に見える。

しかしながら、歌舞伎音楽の中でこれまで最も手薄であった鳴物の分析研究に視点を定め、限られた期間内に骨身を惜しまぬ作業を重ねて提出された本論文は、博士の学位にふさわしい成果であると認められる。今後は、関連領域についての幅広い知識と問題意識を一層深め、歌舞伎音楽研究という巨大な領域を継続して開拓していくことを望む。以上をもって、合格と判断した。